



神道(二) (大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記 はじめに(二)
見識をもて

さて、その聖德太子の編纂された天皇紀、國記などが焼失されてから約三十年間、三十六代孝德、三十七代齊明、三十八代天智、三十九代弘文の天皇の御代は、大化の改新、百濟救援、白村江の敗類、大津京に遷都、壬申の亂などによつて、聖德太子の御意志もそのままになつてゐたのであつたが、遂に天武天皇の十年になつて、國を擧げての修史の大事業の救が降つたのである。

幸にして、國記の一部も残つてゐる。當時編纂にたずさわつてゐた者、またその事情などを知る者もまだ残つてゐたと考へられる。これらを参考にしながら、宮中にあるものもとより、諸家の纂記を詳かに研究し、詐を削り、正を明かにして、神代より傳へられたる我が國の純粹なる神話傳説、歴史を撰出して國體の本義をまこと闡かにしようと思はれたのである。その文章は麗はしい漢文で綴り、總てを我が國古來の國語を以て訓讀出来るやうな様式のもとに計畫されたのであり、對外的にも、我が國に眞の道が存してゐること、我が肇國の由來、皇室の本源、列聖の宏謨の東特麗はしい相を仰がしめて、大いに國威を發揚しやうと企圖せられたのである。何たる偉大なる見識であらう。元より之は我が國が神道その

第6號

月1回發行

ひの心を繼ぐ會

〒791-0510

住所:愛媛縣西條市

丹原町丹原 50-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は國家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

ままの國であるによることで、單に人間の私意と名文をもつて爲し得ることではないのであるが、この國體の本義を明かにすることにこのやうな意圖をもつてせられたことに、天武天皇とその周圍の人々の雄大莊嚴なる相を觀るのである。

その企圖するところが深く高く麗はしければ、さうであるほどその事業は容易なことではない。この修史の事業もはかばかしくはかど抄らず、遂に十五年の秋九月、天武天皇は崩御せられた。

然し、この事業は中止せらるるが如きものではなく、次の四十一代持統天皇(天武天皇の皇后天智天皇の皇女)は持統紀五年八月十三日に「大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野、大伴、紀伊、阿倍、佐伯、采女、穗積、阿曇、平郡、羽田の十八氏に詔して、其の纂記を上進らしむ。」とあるから、此の事業はつづけてなされてをり、これ等の家に資料の提出を仰せ出されたのである。次の四十二代文武天皇は、御年二十五歳で崩御し給ひ、次で四十三代の元明天皇が御位に即かせられたのである。天皇は天武天皇の修史の御意志を強く承継がれて、和銅四年九月には太安萬侶に命じて、翌和銅五年一月二十日には「古事記」の完成を見るにあたり、ついで翌六年には諸國に詔敕して、風土記を編纂して獻上らしめ給ひ、更に翌七年二月には、詔して紀清人、三宅臣藤麻呂等をも編修に與らしめて、國史(所謂る假名日本紀なるべしと云ふ。)を撰ばしめる等、日本書紀の資料を蒐集しゅうしゅうされ、新に天武天皇の皇子舍人親王を總裁とし、博士太安萬侶朝臣を編集長として任命して、この事業を進捗せしめられたのである。かくして、四十四代の元明天皇の養老四年(皇紀一三八〇年)にその業を畢おひらへて五月二十一日に獻上したのである。これが「日本書紀」三十卷。系圖一卷である。古訓では「耶麻

の國であるよること、單に人間の私意と名文をもつて爲し得ることではない。この修史の事業もはかばかしく抄らず、遂に十五年の秋九月、天武天皇は崩御せられた。

然し、この事業は中止せらるるが如きものではなく、次の四十一代持統天皇（天武天皇の皇后天智天皇の皇女）は持統紀五年八月十三日に「大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野、大伴、紀伊、阿倍、佐伯、采女、穗積、阿曇、平郡、羽田の十八氏に詔して、其の纂記を上進らしむ。」とあるから、此の事業はつづけてなされてをり、これ等の家に資料の提出を仰せ出されたのである。

次の四十二代文武天皇は、御年二十五歳で崩御し給ひ、次で四十三代の元明天皇が御位に即かせられたのである。天皇は天武天皇の修史の御意志を強く承け繼がれて、和銅四年九月には太安萬侶に命じて、翌和銅五年一月二十日には「古事記」の完成を見るにいたり、ついで翌六年には諸國に詔敕して、風土記を編纂して献上らしめ給ひ、更に翌七年二月には、詔して紀清人、三宅臣藤麻呂等をも編修に與らしめて、國史（所謂る假名日本紀なるべしと云ふ。）を撰ばしめる等、日本書紀の資料を蒐集され、新に天武天皇の皇子舍人親王を總裁とし、博士太安萬侶朝臣を編集長として任命して、この事業を進抄せしめられたのである。かくして、四十四代の元明天皇の養老四年（皇紀一三八〇年）にその業を畢へて五月二十一日に献上したのである。これが「日本書紀」三十卷。系圖一卷である。古訓では「耶麻騰富美」である。（系圖一卷は其後紛失された。敕撰修史の業は平安朝の延喜初年まで八十年間續けられる。）

「古事記」「日本書紀」の二書は、まさに「神書」として尊ばるべきものである。

「古事記」は、簡潔素直なる文章の中に、格調高く言靈が鳴り響き、誦む身もまたその律動の中に引き入れられ、宇宙生命天の御中主神の幽淵から無限の啓示を汲み、眞理を悟り、幽顯に出入し、日本生命の幽淵と實相を識るであらう。「日本書紀」はその莊嚴雄大華麗なる文章によつて、日本國體のまた莊嚴雄大華麗なる相を觀るであらう。

前者は、古傳説の面目をそのままに傳へんとして、古意古語を保存し、後者は、古語を漢譯し、支那思想を活用して對外的に國威を發揚してゐるの、共に有難いことである。

世の中には奇を好む癖がある。記紀よりも以前に出來た書であるからと言ひ、神代文字で書かれてゐるからと言ひ、祕にして出さなかつたものだとし、記紀より尊いとするものがある。前に記した、富士古文書、竹内古文書、大中臣九鬼古文獻、秀眞傳など數多い。不見識も甚だしいと言ふべきである。このやうな文書が出來て正實を失ふことを懼れて、聖德太子から天武天皇と修史の事業を企てられたのである。これらの書は皆當然撰録され討覆され、偽を削り、實を定めて、後世に傳えられる正史の資料として提出されてゐた筈である。若し、それ、然らずとするものあれば、敕に従わずして、その書を隱遁させたものであつて、日本國家の正史編纂を肯ぜなかつた非民族なるものである。

然しながら、私は記紀以外の古文書を捨てて顧みない者ではない。記紀編纂の經緯を知り、上古神聖立極垂統の正傳たる「神書」たるを信じて、敬し、尊び、ここに學ぶを本格として、後、他の古文書を讀むべきであるとするのである。豈日本の古文書に限らんや、儒、佛、老、基、回、西洋哲學、數學、物理など、皆もつて、記紀を扶翼し補役するものである。確たる「見識」をもたう。（以下次號）

第一章

農の哲學的考察

菅原 兵治

第二節 文質關係より見たる諸相

私共が或る事に従つてそれにいそしむに當つて、其の事の使命が重ければ重いほど、大なれば大なるほど、それほど其の事に對して高き感激と強き努力とを伴ふものである。農の事も亦然りで、農が今日の世相より見て果して何れほどの重き使命を有するか、はた歴史的に見て何れほどの大なる使命を有するかといふことを深く自覺するに至れば、之に對する感激も、矜持も、發奮も、亦自づから異つて來るものである。かゝる意味に於て本節に於ては前述の陰陽文質の四範疇より現下社會の世相を觀察批判して、之に對する「農」の使命の如何に重大なるかといふことを明かにしたいと思ふ。然しそれは要するに「農」の使命の重きを知る所以の爲なので、徒らに社會批判に興ずる爲ではないから、成るべく冗説を避けて、要點のみを略述することとする。

先づ主なる問題を取つて分り易く表解して見る。(圖略)

右表の稻に就いては已に説明したことであるから略することとする。

次に人間の性格に就いて之を見るも、矢張り四つの範疇より之を考へ得る。即ち腹の中に誠を十分藏しながらも軽々しく之を口にせぬといふ朴訥型が「質」で、之に對して十の思うてゐることを、十二にも十三にも花を咲かせて上手にお喋りするといふ巧言型が「文」である。巧言はまだよい。然し腹にないことを唯口先きのみで喋々としゃべつて得々としてゐる浮佞に至つては、もう生命の本質より逸脱せる「浮文」であり、之に對して物言ふことは一切ならぬ。朝夕隣人と顔を見合はしても口も利かぬといふに至つては瀆武の頑固に墮するものである。

次に私共の生活様式を見るに、衣食住に就いて生活必要線的な素朴なる生活が「質」であり、それが人智の進歩と共に向上し發達して、相當に文明の利器の活用も出来るやうになれば、其處に所謂文化生活を生じて來る。是れ即ち「文」である。然し人間の欲望には際限が無く「隴を得て復た蜀を望む」もので、遂に己が身分や境遇の如何も忘れて贅澤三昧の生活に耽けるやうにな

れば、それは已に浮文である。今日一度都會の百貨店等に入つて見れば如何にこの浮華な贅澤物の多いかを見て一驚することであらう。之に對して、其の反動的現象として起つて來る生活が「人間らしき生活」を没却してまでも素略な生活を強ひんとする、寧ろ「粗野」とも謂ふべき瀆武頑固な行き方である。例へば婚禮は夫婦の契りを誓ふ精神的の儀式である。其の儀式さへ行へば三々九度の盃を始め、披露の宴でも水を飲んで結構だ。飲食などいふことは意味の無いこと、全然行ふ必要がない。着物も之と同様だ。禮服などいふは皆虚禮である。土の附いた野良着で結構だといふ類である。

かくの如く、現下の社會の現状を見るに、「質」より「文」、「文」より更に「浮文」と走つて何時しか生命の本質より逸脱せる相の多きに憤り、其の反動として一部に已に瀆武的傾向の出現を見つゝあるが、是れ孔子の所謂「史」と「野」の對立であつて、共に君子の道を去ることが遠い。

農耕の事に就いて之を見よう。嘗つて私は或る地方の稻田の間を通つた時に、「田に落す汗は金肥に勝る」と記した標柱を見たことがある。汗一即ち勤勞は農耕の質である。然し其の汗は、苟くも人間の汗たる以上、肥料に關してはやがて必ず窒素、燐酸、加里の三要素の研究位は出來て來る筈であつて、「汗」から自然に發現して來る「文」である。而してそれが「浮文」になると、只管肥料學の理論的研究を誇つて、「田に落す汗」を忘れ、肥料屋に銘じて金肥を田に運搬させて置けば、それで米は穫れるものと思ふに至るやうな状態になるのである。そこで其の反動として、農業をするのに面倒な學問や知識は要らぬ。唯「汗」を惜しまぬ勞働さへあればよいといふ聲を聴くやうになる。然しそれでは畢竟牛馬の汗の強要であつて「瀆武」「頑迷」の譏を免れない。人間の努力は矢張り汗より離れざる三要素の研究であり、三要素の研究を忘れざる汗の努力であらねばならぬ。換言すれば文質彬々たる努力であらねばならぬ。

次に發育の事に就いて此の關係を反省して見たいと思ふ。教育の質は教育者其の人の人格であらねばならぬ。更に詳しく云へば教はる者が教ふる者の人格を慕つて其の門下に學び、教ふる者と學ぶ者との間に一體的な人格の

交流のあることである。而して此の教育の「質」が發展して此處に自づから
 知育、德育、體育（教授、訓練、養護）の三育の分化が現れて来る。然し此の
 三育は畢竟教育者と被教育者との人格的交流の間から自然の間に發展して來
 るものであることを忘れてはならぬ。然るに現代の教育は、何時しか「浮文」
 の状態に逸脱し、徒らに施設經營の末に走り、更に教科目の羅列となり、其
 の各教科目擔任の教師が知識技能の分割的教授をなし、其の結果を試験とい
 ふ壓搾機によつて壓搾して得たる點數の合計によつて人格價値を評價せんと
 するもので、かくては正しく花瓶の中に唯無暗矢鱈に種々の美しい花を挿入
 された様なもので、仲々に善き實を結ぶものではない。其處で一方に「瀆武」的
 主張として學校教育否定論さへ起り來るに至るのである。

更に政治に於て之を見んか。政治に於ける「質」は爲政者の人格を中心と
 せる徳治政治たることは明瞭である。だから政治の本質に於ては、
 土階三等芟莠剪らざる堯舜の政治を以て理想とする。然しさればといつて全
 然法律制度を必要とせぬといふことではない。其の徳治の結果、必要に應じ
 て其處に次第に法律も制度も生じて來るであらう。然し外部より見ゆるは「文」
 たる法律制度である。かくて政治とは畢竟人間が法の番人となつて運用をな
 すことであるといふ考へすら生じて來るに至り、其の最も顯著なる事例とし
 て議會政治に伴ふ選舉至上主義的なる弊害を見るに至つたのである。或る政
 治理想を實現するには議會に於て多數を得ねばならぬ。其の爲には選舉に於
 て多數の當選者を得るを必要とする。當選する爲には選舉區民の關心を買は
 ねばならぬ。其の爲には政治の實質といふことは第二第三として民衆への宣
 傳が第一である。かくて近來の政治は遂に宣傳政治、選舉第一主義的政治に
 墮しつゝある。これ實に政治の浮文的状态でなくて何であらう。而して之が
 反動として起り來りつゝあるものが、所謂獨裁政治の謳歌であり、若しくは
 更に瀆武的なる暴力革命的傾向の出現である。然し政治の本體は爲政者其の
 人の生ける人格であり、而してこれよりおのづからに發展せる必要なる限り
 に於ける法制組織である。換言すれば「徳」と「法」との間の彬々たる文質の
 調和を失はぬ所にあらねばならぬ。

以上造化運行の法則たる陰陽文質の關係に基いて現代社會人生の諸相を一
 瞥したが、現在の世相は其の何れの方面を見るも、其の多くは已に造化の本
 質より遊離せる「浮文」的状态に彷徨してゐる。而して之に對して一部の人々
 は何れの世にもあることながら、慷慨の餘り「瀆武」とも稱すべき反動的狀
 態に走りつゝあることに氣付くであらう。（此の事は單に政治的問題のみに非
 ず、日常の家庭生活の問題に至るまで然りである。）然し此處で深思せねばな
 らぬことは、「瀆武」も「浮文」も共に「眞」にして「新」なるべき道ではな
 いことである。譬へば「浮文」は夏草の繁れる荒蕪地のやうなものである。之
 を開墾しようとして、晩秋それに火をつけて焼き拂ふのが「瀆武」である。然
 し其の後に蒔下すべき「眞」にして「新」なる種子を準備することを怠つては
 ならぬ。來る春に伸長すべき潑刺清新たる新生命は決して浮文や瀆武の中か
 ら生れては來ない。浮文を惡むの餘り、瀆武に陥つてはならぬ。論語顏淵篇
 に次の一節がある。

棘成子といふ衛の大夫が、當時の人々が滔々として浮文に走るを惡んで、
 「君子の行ふ所は『質』のみで澤山だ。『文』などいふことは全然無用のもの
 である。」

と言つた。之を聽いた子貢は懇ろに教へて、
 「どうも夫子の君子の説は、惜しいかな、少々言ひ過ぎです。何でも言葉と
 いふものは、一たび之を發してしまふと、四頭立ての馬車で追いかけても取
 り返しのつかぬものですからね……。一體『文』と『質』とは相俟つて存すべ
 きものであつて、決して『文』を全然否定して、『質』のみを取る―即ち瀆武
 の頑固に墮すべきものではありません。若し全然『文』を否定排撃するとい
 ふならば、虎や豹の皮からあの美しい毛を除き去つて、鞞としたやうなも
 ので、それでは犬や羊の鞞と何等異なる處がなくなるではありませんか。」と。
 虎や豹の皮からあの美しい毛をすつかり剥ぎ取つてしまつて、犬や羊の鞞
 と同じにしなければならぬとすることは、其の意氣や壯に見ゆるであらうが、
 決して眞の歸質の道ではない。私共の眞に爲さねばならぬことは、社會人生
 の諸相をして希くば新にして眞なる正しき質に歸せしむることである。

勿論質に歸せしむるといふことは、決して未開の昔—「野」に歸へすの謂ではない。人生は造化である。永遠なる創造的進化そのものである。逆行などあり得るものではない。苟まじくに日に新に、日々に新に、又日に新なるのが、これ人生である。従つて「歸質」といふも、それは現代の世相を経て、其の文化を十分攝取收藏して、然る後更に新しき「質」を形成することである。—恰度開き切つた花が散つて、新しき實を結ぶやうに。同じく實を結ぶといつても、今年の實は決して去年の實ではないのである。

かくて世紀末的廢頹爛熟期はんじやくの世相を救ふ所以の道は誠に歸質にある。然し歸質といふことは、言ふは易いが其の實行に至つては、實に浮文的なる社會全體に涉つて「一切價値の顛倒」—百八十度の轉廻を來さねばならぬ大問題である。決してさう容易のことではない。かかる時に當つて私共の先づ深く考へねばならぬことは、其の匡救改新に何處から手をつけるかといふことである。灸をやるのに灸師は經穴きやうけつ(灸點)を取つて、其處に灸を据ゑると不思議に病根が治るものである。天井の電燈に點火するにも、何のスイッチを押せばよいかといふことを明かにせねばならぬ。これと同様に社會の病根を治すにも、亦其の灸點、スイッチを發見して、之に向つて努力せねばならぬ。さうでなければ勞のみ多くして効果を得られないものである。

然らば歸質的運行の經穴、スイッチは何か。私は此處に我が農道生活の意義と價値とを認むるものである。古來「農は國の本なり」といつて來たが、一身一家に於ても、一郷一國に於ても、眞に農道的生活を重んじて之を化導して行けば、それは自づから本(即ち質)に歸するものであり、反對に商工的生活(詳しくいへば都市商工的生活)を重んじて之を化導して行けば、自づと文・浮文に走つて行き勝ちなものである。乃ち知る、歸農的努力、重農的政教は、民をして自然の裏に「本」を培ひ、「質」に歸せしむる所以なることを。かくて私は次節に於て、時務的にかゝる重大なる使命を有する農本生活の何ものなるかを論ずることとする。

古人の金言を靜思す①

〔本立ちて道生ず〕

三浦 夏南

神明の聖光が照らす理想の道は高く美しき一筋の正道ではあるが、その道程は遠く険しく容易に辿りつけるものではない。千里の道も一步からであり、如何に遠大な目標も着實な努力の積み重ねによる外ない。その無限の道中に於て薄志の凡夫は迷ひ、悩み、怠り易きを常とする。その度に我が身に鞭打ち心底の正氣を奮ひ起こし続ける必要がある。古人の金言は純正簡潔であり、冷たき鍼はりの如く身を刺し、懦夫を起たしめる。

皇道農業といひ、一族勤皇といふ。言ふは易いが、行ふは難い。況や勤皇村ともなれば、明治の先哲すら未到の境地である。ここを目指し、ここに達するには文字通り永遠の努力を要する。永遠の中の一日を着實に歩むべく、ここに古人の金言を録して、反省の資としたい。

有子曰、其爲人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好作亂者未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。(論語學而第二章)

有子曰く、其人となりや孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして、亂を作すことを好む者は未だ之有らざるなり。

君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なるものは、それ仁を爲すの本か。

父兄に對して忠實な人間は世間にも年長者を立てて行く。年長者を敬ひ、誠實に生きてゐる人間が社會的な騷亂を起す事などあり得ない。つまり、世の中から争ひを消さうと思へば、その根本は父を敬ひ、兄に従ふ良心を啓き起すことにある。現象だけに囚はれてみると如何にして騷亂を抑へるかといふ方法論に終始してしまふが、その根本に歸れば、父兄を敬うべき所以を我が一身の内に省みて行く修身の問題に行き着く。故に君子は物事の根本を洞察し、然るべき努力をするもので、末端の現象には心を惑はせることがな

い。道とは天地の大經であり、本末終始を一貫するものであるが、根本が定まつて始めて、末を正しく終へることが出来る。例へば植物も根から花まで一貫して植物として生きてゐるが、根が強く強く張つて初めて、葉も伸ばすことが出来、花實も結ぶことが出来る。根が本であり、花が末である。本が定まつてこそ道が行はれ、植物はその生理を圓滑に全ふすることが出来る。仁を爲して行くことは天神地祇に仕へ奉ることより始まり、人類はもとより山川草木にまで及ぼして行くべき廣大なものであるが、その根本であり、始まりは、孝弟の誠心と實行にあるのである。

最近、家が臨濟宗なこともあり、一寸したことはくいんぜんしから白隱禪師の『夜船閑話』やせんかんわを拜讀してゐた。白隱禪師は若いころに修行の行き過ぎから禪病にかかり、苦しまれるのだが、その症状の描寫に頭に氣が上り手足が冷えるところ。その後、山に登り仙人より呼吸法及び觀法を傳授して頂き、丹念に實修されたところ、氣は肚に満ち、下半身は温かく充實し、頭は涼しく冴えわたるやうになつたといふ。これを讀んでゐると心に「本立ちて道生ず」の言葉が浮かんで來た。身體で言へば、肚といふ根本を据ゑることによつて全體の生理が正しく行はれる。社會秩序と人體生理と枠組みは違へども一貫する道理は一つである。

また似た事柄であるが、安岡先生が著書の中で度々紹介されてゐる眞向法まっこうほうといふ體操がある。具體的な内容は略するが、白隱禪師の觀法と同じく氣を肚に充實させ、下半身を堅強にする體操である。その創始者の方が著書の中で現代の人間は等しく下半身が弱いといふことを言つて居られた。下半身が弱いといふことは肚が出来て居らず、氣は全て上半身に浮き上がつてしまつてゐるといふことである。これでは表面上の病を如何に巧みに處理できたところで、病原は除かれず、新たな病が百出するばかりである。

これを農に於て考へてみると、農に取り組むことは身體的にも倫理的にも本を務めて行くことに繋がる。農業ほどしやがむことを必要とする仕事も少ないのではないか。土と関わるといふことは當然しやがみながら働くことが

基本となる。草取り然り、植ゑ付け然りである。呼吸法關連の本に親指に力を入れてしやがむことは丹田を鍛へる上で極めて有効であると書かれてゐたことを思ひ出す。思ひ荷物を運ぶことも下半身を鍛へることに繋がる。農家の先輩方の體格が下半身を中心として強健であるのも、日々の意識されない鍛鍊の賜物である。

倫理的には農は天地に對する孝弟である。天に祈念し、地に奉仕するは自然といふ親に對して孝行することである。この體験が日本人の神に對する、祖先に對する、父兄に對する隨順の根本である。「農は國の本なり」といふ古言があるが、國民を物理的に養ふ産業としてだけでなく、身體的にも倫理的にも農は本であるといふことが出来る。

人は末に流されやすい。本質を忘れて末端の現象に囚はれやすいのが人心である。本を務めるはずの農も機械化により鍛鍊の要素を失ひ、營利化によつて天地への奉仕の意識を忘れかけてゐる。常に古言を胸中に拜誦して心の本質へと向け續けることが大切である。朱子が論語集註の學而の始めに當つて「本を務む」の語を強調し、學而はもとより論語全編をこの立場より讀んで行かねばならぬと戒められてゐることも先哲の有難き教示である。

★活動報告

- ・九月十一日（火）勉強會『農士道』を開催。
- ・九月二十八日（金）勉強會『土居清良』を開催。

★今後の予定

- ・十月十六日（火）十九時～二十一時 『農士道』
松山市男女共同参画推進センター☆コムズ三階會議室 一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

- ・十月三十日（火）十九時～二十一時 『土居清良』
松山市男女共同参画推進センター☆コムズ三階會議室 一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

★一燈照隅 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・贊助會員 一萬圓
- ・特別贊助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

